

原 著

高齢者が生活上経験する スピリチュアルなテーマに関する研究 －生きる意味に焦点をあてた質的研究－

岡 本 宣 雄^{*1}

要 約

本研究は、介護の支援が必要であり、福祉サービスを利用して生活を営む高齢者が、どのようなスピリチュアルなテーマに直面しているかを、スピリチュアリティの主要な下位概念である「生きる意味」に焦点を当て、質的研究により明らかにする。「生きる意味に関する質的調査」の結果、6つのカテゴリー：[人生の出来事を乗り越えてきた] [ただ平凡に人間らしく生きる] [超越的なものとつながる] [死に思いを馳せる] [有限な存在として生きる] [責任を果たして生きる] とこれらに関連する23のコードが抽出された。そして、高齢者のスピリチュアルなテーマを捉える際の理論的枠組み：「時間×関係×価値」が提示された。この枠組みを活用し、高齢者が生活上経験するスピリチュアルな痛み、意味の充足を促すストレングスとして機能するスピリチュアリティの理解が必要である。

1. 序論

高齢社会を迎えるわが国は、高齢者が住み慣れた地域で、自立生活が実現できるよう、包括的ケアシステムの理念が掲げられている。そこで医療、福祉、行政などの専門機関や非営利団体により連携・協働し多様なサービスや支援が進められている。その動きのなかで、多くの高齢者は介護サービスを利用している。

介護サービスを提供する専門職は、実際に生活支援を実施するとき、利用者自身の価値、信条、宗教などの内容を含むスピリチュアルな側面を十分に捉えきれていない状況にある¹⁾。高齢者は、この世界と社会関係のなかで生きる者として、自らの存在意義を問い、価値を認識し、人生に意味付を行いながら生活を営んでいる²⁾。利用者自身のスピリチュアルな側面が理解されない状態で提供される介護サービスは、その人の人生での意味の充足が果たせない表面的、場当たりの内容となり、望む生活につながらない可能性がある。

本研究では、介護の支援が必要であり、福祉サービスを利用して生活を営む高齢者が、その生活のな

かで、どのようなスピリチュアルな課題に直面し、あるいは、自らのスピリチュアリティによってその生がいかに強められているかを明らかにする。そのために、スピリチュアリティの主要な下位概念である「生きる意味」に焦点を当て、質的研究の方法を用いる。そして、「生きる意味に関する質的調査」の結果と分析の一部を用い、「高齢者が生活上経験する生きる意味としてのスピリチュアルなテーマ」を抽出し分析する。これらを踏まえ、高齢者のスピリチュアリティを捉える理論的枠組み（説明図式・理論）を提示する。

2. 問題の設定

従来、スピリチュアリティを鑑みたケアの多くは、医療分野のホスピス・緩和ケアで展開されてきた³⁾。そこでは主にスピリチュアルペインの除去と緩和がケアの目標とされた。近年、福祉分野の生活支援の現場、例えば、ソーシャルワーク、介護の領域で対人援助の視点から利用者のスピリチュアリティに焦点を当てたケアの意義と実際に関する研究や実践の重要性が強調されるようになってきた⁴⁾。

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
(連絡先) 岡本宣雄 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-mail : nobuo@mw.kawasaki-m.ac.jp

ソーシャルワークの分野でスピリチュアリティの研究で著名である、Canda ER はスピリチュアリティを、広義には、人間であることの全体性の観点から「生物的・精神的・社会的・霊的な側面をすべて含む、人間の生活と発達的全过程のゲシュタルト（全体像）として概念化する。」⁵⁾つまり、人は本質的にスピリチュアルな存在そのものであると定義する。また、狭義には、スピリチュアリティが個人や集団の経験にむすびついているとし、「『スピリチュアル』なものは、人が意味を求め、自己自身、他者、すべてを包括する宇宙、実在の存在論的基盤とのあいだに道徳的にみたされた関係を求めることと結びついている」⁵⁾とスピリチュアリティを機能的に解釈し定義する。そして、スピリチュアリティの概念の属性に「意味を探究しようとする人間の生得的な衝動 (innate drive)」⁶⁾を認める。

そこで、本研究では、スピリチュアリティを「人間が生来的にもち、自己、他者、超越的なものとの関係のなかで、生きる意味を見出す生の側面である。」と定義する。そして、スピリチュアリティの主要な下位概念である「生きる意味」^{7)†1)}に焦点を当て、高齢者が生活上経験する生きる意味としてのスピリチュアルなテーマを考察する。加えて、本研究では「スピリチュアルなテーマ」(spiritual theme)を「生活との相互作用のなかで生じ、人間の情緒、認知、行動の基調となるスピリチュアリティに関連する主題や事柄」と定義する。

3. 研究の方法

3.1 調査方法

調査方法はインタビュー法である。インタビューは、2011年1月～2012月4月に実施した。調査の対象者は、A 県 B 市に在住する「老人デイサービス」1ヶ所・利用者3名（女性3名）、C 市の「介護付き有料老人ホーム」1ヶ所・入居者7名（男性3名、女性4名）の計10名である（表1）。個人のインタビュー

は各1回、約50分を要し、計5回にわたり訪問した。インタビューは施設の面談室または利用者の居室（個室）にて実施した。インタビューの対象者は、利用施設の職員から紹介を受け選定を行った。

3.2 調査内容

インタビューの主要な内容は、①フランク（Frankl VE）のロゴセラピーの考えに基づいて、米国のクランバウ（Crumbaugh JC）らにより考案された PIL テスト（Purpose in Life Test）（生きる意味・目的意識を測定する心理検査）⁸⁾の Part-B,C の項目、②三澤らにより開発された「高齢者のスピリチュアリティ評価尺度調査票」⁹⁾の項目の一部をインタビューガイドとし、調査対象者に自由に語ってもらった。

3.3 分析方法

分析方法は、佐藤が採用する「定性的（質的）コーディング」¹⁰⁾を用いた。本研究では定性的（質的）コーディングの手続きを3段階¹¹⁾で行った。それらは、次のような段階である。①個人のインタビューのデータを逐語訳し、それらを意味内容ごとに「定性的コード」を割り出した。②概念の一般化に向け、先行研究を参考に、インタビュー内容を比較検討し、「（定性的）コード」から「（概念的）カテゴリー」を生成した。その後③生成した各コードと（概念的）カテゴリーを分析し、これらの内容検討から、説明図式（理論）を導き出した。

なお、分析に際し、これら①～③の作業を繰り返して行った。「定性的（質的）コーディング」の分析作業は、この分析で特徴的である「継続的比較法」の発想にもとづいた「事例－コード・マトリックス」の手法を取った。「事例－コード・マトリックス」を用い、特に②の作業で、「複数のコード（あるいは、カテゴリー）間の比較」「データ（セグメント）とカテゴリーの比較」「複数のデータ（セグメント）間の比較」「複数の事例間の比較」のこれら4種類の継続的比較法を行った。データ分析の結果は、スピ

表1 調査対象者の属性

| | 名前 | 性別 | 年齢（歳） | 要介護度 | 宗教（宗派） | 調査場所（機関・施設） |
|----|----|----|-------|-------|----------|--------------|
| 1 | A | 女 | 82 | 要支援 2 | 宗教なし | 老人デイサービス |
| 2 | B | 女 | 90 | 要支援 1 | 仏教（浄土真宗） | 老人デイサービス |
| 3 | C | 女 | 84 | 要介護 1 | 仏教（浄土真宗） | 老人デイサービス |
| 4 | D | 男 | 87 | 要支援 1 | 仏教（真言宗） | 有料老人ホーム（介護付） |
| 5 | E | 女 | 87 | 要支援 1 | 仏教（真言宗） | 有料老人ホーム（介護付） |
| 6 | F | 女 | 85 | 要支援 1 | キリスト教 | 有料老人ホーム（介護付） |
| 7 | G | 女 | 83 | 要支援 1 | 宗教なし | 有料老人ホーム（介護付） |
| 8 | H | 女 | 89 | 要介護 1 | 仏教（真言宗） | 有料老人ホーム（介護付） |
| 9 | I | 男 | 78 | 要支援 1 | 宗教なし | 有料老人ホーム（介護付） |
| 10 | J | 男 | 93 | 要支援 1 | 仏教（不明） | 有料老人ホーム（介護付） |

リチュアリティの研究に精通した研究者が集う研究会、質的研究会で検討し、分析結果の妥当性を確保した。

3.4 倫理的配慮

本調査に際し、倫理的配慮に関して、研究者が所属する大学の倫理委員会にて承認を得ている（承認番号227）。インタビュー調査にあたっては協力施設と調査対象者に文書にて研究目的、内容、方法を説明し、文書で同意を得ている。また、その結果を研究目的で発表する旨の許可を得ている。また、調査

対象者には、後日、インタビュー内容の撤回ができることを説明した。また、その家族宛てに調査の趣旨と内容の説明を記した文書を作成し調査の協力を依頼した。

4. 調査結果と考察

質的調査の結果と分析により、「高齢者が生活上経験する生きる意味としてのスピリチュアルなテーマ」として、6つのカテゴリーと23のコードが抽出された。

表2 高齢者が生活上経験する生きる意味としてのスピリチュアルなテーマ

| カテゴリー | コード | データの一部 |
|----------------------------|-------------------|--|
| 1 人生の出来事 を乗り越えてきた | 人生の節目を乗り越えてきた | 戦死した人（前夫）な、この子を頼む言うてな。…あの、戦地行ってな、よう帰ってこらんだけん、その子どもを頼まれとるけ、この子ども育ててきた。（B：11/01/14）、シベリアへ抑留された口なんです…ああいう節目、乗り越えてきたから。（D：11/02/04） |
| | 日常の働きのなかで懸命に生きてきた | 何もかもやめて、もう百姓してきました。大きなお腹でも、昔は手植えですからね。ほーっていきそうになったけど、ああ、いけんいけんと思って頑張りました。（A：11/01/14）、子どもにしてあげたりね。社会へお返しできたり、ある程度はできたんじゃないかと思いますわね。（I：12/04/20） |
| | 継続して能力を滋養してきた | 私は、もうずっとそうやって、田んぼをしてな。…難儀はしてな、…まあ元気でな、働けたいうこが一番うれしい。（B：11/01/14）、仕事の関係ですな。…自分の知ってること、部下に教えてね。指導したもんでしたね。経理一本です。…満70才になるまで働いたですから。（D：11/02/04） |
| 2 ただ平凡に 人間らしく 生きる | 迷惑を掛けずに生きる | 病気になって寝たきりになったりとかはな、みんなに迷惑かかるけど、どうしようもないですよなあ。だから、なるべくそういうふうにならんで、あの世へ行くほうが一番ね。（E：11/02/04）、なるべくお世話にならないように気を付けて。ただ平凡に人間らしく生きられたらいいなあぐらいしか考えてません。（F：11/02/04） |
| | 日々の日課をこなす | 朝起きたら、服着て、食事を朝食べて、もうテレビ、座って、掃除もせんからしなないと。…ここ（デイサービス）へ来る日は張り切って早く起きてます。もう、その、日課言やあ、その繰り返しじゃから。何やろね。（A：11/01/14）、朝の散歩だけです。…朝の散歩で、宇宙を見る。…あれはもう、死ぬまで、どんなことがあっても続けたいと思っていますね。（F：11/02/04） |
| | 他者（家族）の幸せを願い生きる | まあ、とにかく家族がいいようにいってくれさえすれば、それが、もう、最高の望みです。…その、途中でたるむことなしに、いい調子にしてくれる。それが望みです。（C：11/01/21）、やっぱり、自分の息子や娘の家庭が生活の苦勞せずに、うん、健康であってほしいと。それが、やはり親としての気持ちがありますね。そういうことしか考えませんね。（D：11/02/04） |
| | 「あるがまま」で生きる | もう、希望も何もない、尽忠が立てばいいだけのことじゃからなあ。一日が無事に過ごせた、面白かったなあというだけです。（A：11/01/14）、あるがままに生きて、それが人に受け入れられて、社会に受け入れられていくんならですよ。…もうこの歳ですから、将来何してどうしたらどんなふうのって考えるよりね、あるがままに幸せに感ずるような、そういう修練をしたいですね。（B：12/04/20） |
| 3 超越的なもの とつながる | 自分の力を超えた力が働いている | もう心配性じゃけんな、拝みよらんな、おれんな。…もう、みんな、神様や仏様の力借りな、生きていかれんな。（B：11/01/14）、私は生かされてきたんで。…今、このホームでは、支えられて生きていると思います。…私はどんなことをしていただいても、今、ありがたいなと思います。…やっぱり、偉大な存在を求めているからじゃないですか。（F：11/02/04） |

（次頁に続く）

| | | | |
|---|---------------------------|--------------------|--|
| 3 | (3の続き) 超越的なものとつながる | 先祖とつながる | 先祖のことはな、本当、大事にせにやらないけません。…少しでもいいほうへ行くといい。うん。そのときは、あの、お祈りしますよ、一生懸命。(E:11/02/04) まあ、こうやって生きとるのも、ご先祖様のお陰じゃろうかなと思って。…仏様を拝んだり、手を合わせたり。それだけ、お陰があるかなあと思ったりもします。(G:11/02/21) |
| | | 宗教的な行為を行う | 真言宗じゃけん、あの、拝みよる、毎朝。…6時に起きてな。「タカマノハラ」拝んでな。それから、あの、お仏前を拝む。時間かかるわ、1時間ぐらい。(B:11/01/14)、棚の上、松でも榎でも置いてね。そいで、そこへご飯あげましたりね。あの、お酒とかお水とかあげてね。(A:11/01/14) |
| | | 宗教・宗派的なコミュニティにつながる | 親族とのいろんな行事、やれ何回忌だ、お祭りだとかいう。そしたら、必ず参加して。(D:11/02/04)、お寺の檀家になったからですからね。お寺のお坊さんが、…拝みに来られますね、彼岸の日とかお盆とかね。そういうことにつながりがあったり、そこでお葬式頼んだりね、一般的なそういうことに従ったわけです。(I:12/04/20) |
| 4 | 死に思いを馳せる | 死の意味を問う | 人は生まれれば、狭き門を出て、狭き門に入っていく。…今は、あの、のどかで豊かに生きてると思いますからね。死もやっぱり狭い世界だと思ってるんでしょうね。(F:11/02/04)、(死は)自然の現象であろうと思いますね。…地球上の生物はみないつか死ぬわけですから、…私もその生物の1つです。種族の1つですから、…命あるものは必ず死すのが、これは真理だと思いますわね。(I:12/04/20) |
| | | 親しい人(家族)と死に別れる | 一番は、やっぱり長男(兄)が死亡したときでしょうかね。…一生忘れていません。(F:11/02/04)、4年前ですね。あの、妹がおりましてね。…あの、病気で、もう生活が自分でできん…。食べることができなくなって、ほんでもう、ここへあの子が入るから、私も一緒に(老人ホームに)入ろうというて。…今はもう死にました。脊椎のがんですわ。(E:11/02/04) |
| | | 死と向き合う態度を取る | 死ぬことも別に怖くはないです。覚悟してます。…別に逝きとうないのに逝かにゃならんとか、そういう弱音は吐きません。(C:11/01/21)、お迎えが来るときには来るんだと。いつ死んでもいいんだという気持ちでおらんといけんなどは思ってますね。(D:11/02/04)、神様が仏様かどっちか分からんけどな、…神様がおられれば、あの、神様にお任せしとる。…死は自分で決められない。(I:12/04/20) |
| | | お墓を大切ににする | 主人が自分が入るお墓は心残りのねえように、きちっとして亡くなってますから。…何も心配することはないです。(F:11/02/21)、やっぱり自分の死後だな。…私のことを、やっぱり、私の死後だな、忘れんように。自分らの記憶に入れてほしいという気持ちはありますね。(D:11/02/04)、1年に3回な、盆、春夏の彼岸とお盆とな、お金出して(掃除)してもらおう。(E:11/02/04) |
| | | 死ぬことへの準備をする | 兄弟の間へ、あの、骨をうずめてもらいたいっていうような気持ちがあるんですよ。(F:11/02/24)、娘によう言うんですけど、尊厳死いいですかね、あの、もう、もう駄目だと思ったら、それで、なんかかんか、器具をひっつけて、あの、1日でも2日でも長う生きさそうというようなことはするなって。はい、もうね、あの、自然のままで、あの、死んだらいいと。(I:12/04/20) |
| 5 | 有限な存在として生きる | 人生に悔いを覚える | その家を投げてきたから、私の主人が怒ってるかなあ、それで私、こんなに痛いことが続くかなあと思うて。思うようなんやけどね。(A:11/01/14)、一人、子どもを亡くしたのが残念です。…池にはまって死んだんですよ。…2才ぐらいです。…堀池を掘っとったら、妹が守りしよって、主人の妹が守りしよって、池へはめてしまったんです。…それが残念です。(G:11/02/21) |
| | | 病気や苦しみの意味を問う | (病気は)自分がやっぱり原因でなっておると思いますね。…それはまあ自己責任だと。(I:12/04/20)、もう、自分が年とってみな分かりませんね。…時々ね、足が痛かったら、親孝行せんかったから、罰当たったかなと思います。(H:11/02/21)、病気を決めるって、天道さんか決めたんじゃろうと思います。…お前はな、いつまでし、生きられるということ。(J:12/04/20) |
| | | 人生に空虚感を抱く | 時々、無意味なと思うときもありますね。…ここ(有料ホーム)に入ってますけど。…全部、(職員に)支えてもらって生きていますからね。(F:11/02/04)、私も、どう言おうか、何か、皆さんとね、かわいがられるように、それになりたいと思うぐらいで、(やりたいことは)もうないですよ。…みんなに嫌われないでね、いい年寄、見習わにゃいけんあと。(A:11/01/14) |

(次頁に続く)

| | | | |
|---|------------|----------------|--|
| 6 | 責任を果たして生きる | 自分の生き方を整える | (本当の目的は) やっぱり生きることでしょうね。…どんな状態になっても、与えられた命を守って、生きていくことでしょうね。(F:11/02/04)、ただ、その信念持てれば、それがしたいということなのでしょうけど。結局、通り一遍のことが、できたらいいぐらいに思ってますんでね。…まあ、人間として恥ずかしくないような行動ができたとは思っております。(I:12/04/20) |
| | | 達成したい目標をもって過ごす | お茶のお手前、もう一遍だけ(座って)できたらなあと思うので。…お茶をしてみると、相手を大事にできるので。お茶を点てて差し上げたいなあっていう気持ちはありますね。(F:11/02/04)、私な、もう元気にありゃあな、あの、野菜作りがしたい。…野菜をな、苗を買ってきて、これを買ってきてな、それで、その大きゅうなる姿が見るんが好きなんやわ。(B:11/01/14) |
| | | 人のために力を尽くして生きる | 私が(畑で)作ったんじゃけ、食べてって言うて、それで、娘と孫がな、取りに来てな、持っていぬる。…まあ、ありがと、ありがと言うてな。(B:11/01/14)、そりゃあ、お金があれば、困ってる子にやりたいなんて思うけれど。…私、自分で抱え込もうとは思わないからね。気持ちだけで、なかなか実行はできないですけど。(A:11/01/14) |
| | | 大切なことを伝えておきたい | 若い者に今日もお飾り下ろしとかな駄目よとか、今日は御鏡を下ろしとかないけない、お飾りも下ろす日よ言うて、あんなことは伝えとかにゃいけん、(A:11/01/14)、野菜を作るんでも伝えていきたいけど、…ご先祖の田んぼがあるけえな。(B:11/10/14)、うちの家系をな、…それらをみんなに伝えりゃあええんじゃけど、伝えとらんからな。みんな、知りませんわな。(I:12/02/20) |

4.1 カテゴリー・コードの定義および考察

4.1.1 人生の出来事を乗り越えてきた

カテゴリー: {人生の出来事を乗り越えてきた} は、時間軸を過去に向け、経験した出来事、乗り越えた事柄に意味付けし、自らとその人生を評価して生きる高齢者の実感を表わす。Erikson JM は、発達心理学の観点から、老年期が人生の諸問題を全体的に眺められるようになること、つまり、これまでの人生で経験した出来事を統合することが課題であり、もしこれに失敗すると絶望に陥るとする¹²⁾。

このカテゴリーは、コード: [人生の節目を乗り越えてきた] [日常の働きのなかで懸命に生きてきた] [継続して能力を滋養してきた] から構成される。

経験した人生の出来事にはレベルがある。[人生の節目を乗り越えてきた] の人生の節目は、予想されない、想像を超えた人生や生死を左右するレベルの重大な出来事を指し示す。[日常生活のなかで懸命に生きてきた] は、生活の視点から過去の体験を回顧したとき、生活する日々の営みで起こる困難や課題を引き受け対処し、これまで生きてきたという実感を表わす。[継続して能力を滋養してきた] は、過去を回顧したとき、継続し仕事や日常の働きをしてきた、やり遂げてきたことを評価し人生を肯定する側面である。

4.1.2 ただ平凡に人間らしく生きる

カテゴリー: {ただ平凡に人間らしく生きる} は、時間の基軸を現在とし、過去との連続性と社会や対人関係のなかで、ごくあたりまえの生活のなかで自分とその人生を意味付ける心情を表わす。高齢者は

現在の生活とこれからの人生に、具体的で生産的・創造的な目標や活動に価値を置くよりも、平凡な生活のなかに、無事で心安らぐ安寧を重視する。

このカテゴリーはコード: [迷惑を掛けずに生きる] [日々の日課をこなす] [他者(家族)の幸せを願い生きる] [「あるがまま」で生きる] から構成される。

[迷惑を掛けずに生きる] は、平凡に生きることを望む高齢者が、身近な者に負担を掛けたくないと思う心情のことである。高齢者は身体的な疾病や機能の低下などで、これまでの「世話をする者」から「世話を掛ける者」へと立場が変化し、役割を果たすことが困難となることを憂い、自らの存在意義を懷疑する。そして、家族に介護負担を掛けずに、死を迎えたいと消極的にも取れる心情を表現する。

[日々の日課をこなす] は、人生に大きな期待と具体的な目標、生産的で、能動的な行為による活動に価値を置くよりも、過去との連続してある現在の平凡な日常を重んじることである。高齢者は習慣化された日々繰り返される目の前の仕事を役割とし「やってのける」ところに生きる意味を実感する。

[他者(家族)の幸せを願い生きる] は、高齢者が日々の暮らしの身近な存在である家族、子どもや孫などの健やかな成長を願い、生活が支障なく維持され、彼らの幸福や希望が叶えられることを願いとし希望することである。ここには自分の欲求や目標の達成よりも、世代を超えた身近な者たちへの幸いを願う、他者性の特徴がある。[「あるがまま」で生きる] は、平凡な日常で経験する事柄に価値をおく

高齢者の心情である。人生の目的が「あるがままに生きること」との心境には、「何かに委ねること」で開ける真実の世界を見ることができると。また、「あるがまま」の言葉には、WHO が示すスピリチュアリティの下位概念である「諦念」¹³⁾が含まれると解釈できる。この諦め気持ちには、それを超えた道理を悟ること、真理を諦観する意が共存していると考える。

4. 1. 3 超越的なものをつながる

カテゴリー：「超越的なものをつながる」は、人間の特質である宗教性に関連する事項である。すなわち、人間は有限な存在として世界を生きるが、そのただなかで自らの力を超えたもの、永遠なるものとつながり、そこでもたらされる安寧や希望に生の拠り処を求めるニーズをもっていることを表している。

このカテゴリーはコード：「自分の力を超えた力が働いている」「先祖とつながる」「宗教的な行為を行う」「宗教・宗派的なコミュニティにつながる」から構成される。

「自分の力を超えた力が働いている」は、神（仏）や自然、宇宙など、自分の力を超えたものとの関係で生を意味付ける感覚である。高齢者は人生で獲得した物質、人的な交わりを手放すプロセスにあり喪失体験をする。そのなかで、時間や状況を超え揺るがず、永遠なるもの、真実なるものを求めている¹⁴⁾。特に高齢者の語りにある「生かされている」は、人間が生きることの根底に、自分の力を超え真に人を生かす存在と力の働きがある、つまり、生きるとは、実は「生かされること」との超越性の観点と特質が示されている。「先祖とつながる」は、超越的なつながりは先祖との人格的な交わりというかたちで示されている。人生や日々の生活は、目には見えない先祖の「お守り」があって成立する。人生では予想できない生死にかかわる出来事に遭遇するが、このような時にも「お蔭」に象徴される先祖の力と支えがあることへの信頼が実感されている。

「宗教的な行為を行う」は超越的なものにつながり、それに応答するときに起こる行為を表現している。高齢者は日常生活で、仏壇や神棚の上の花や水を替え、供え物をし、仏具や神具を用いお経を唱え、手を合わせ祈るなど、宗教的な行為を習慣的に行っている。居住空間でも特別な場所でない台所などにも神が宿り、神仏など目に見えない神仏の力と守りを身近に感じながら、家族の無事と健康、幸福を内容とする祈祷を行っている。「宗教・宗派的なコミュニティにつながる」は、信仰共同体（組織）や特定の宗教・宗派のコミュニティとのつながりを表して

いる。神道や多神教文化の影響のもと、日本は汎神論的な風土にある。換言すれば、あまりにも身近に超越的なものがあり、自覚的に宗教（宗派）を捉えることが少ない傾向にある。その反面、地域に現存する先祖から継続する宗教・宗派、神社の氏子や仏寺の檀家に属する者として責任をもつ意識があり、供養の時など定期的に宗教者の自宅訪問を受ける、また宗派の行事などに参加する者もいる。

4. 1. 4 死に思いを馳せる

カテゴリー：「死に思いを馳せる」は、死を、いつ、どこで迎え、そのことにどのような意味があるのか、死までの不確定な時のなかにも現実の事柄として気持ちや考えを至らせることである。死は生の終わり、究極の限界ともいえる。その意味で、死は人の力を超越した領域である。ここには、厳粛な死の現実の前で、死の本質的な意味を問い、社会関係のなかで死の備えをする特質が表れている。

このカテゴリーはコード：「死の意味を問う」「親しい人（家族）と死に別れる」「死と向き合う態度を取る」「墓を大切にする」「死ぬことへの準備をする」から構成される。

「死の意味を問う」は「1人称の死」^{15)†2)}の理解、すなわち、自分にとって死の本質を問う特質である。死を迎える現実の前で、「死とは」「靈魂とは」「死後の世界とは」「永遠のいのちとは」「真の救済とは」「お迎えが来るとは」などの死の本質について問いである。高齢者は必ず迎える死を自然の現象である、また、一般化されない自らの死が、真実の世界へ通じる入り口や契機であると意味付ける者もいる¹⁶⁾。

「親しい人（家族）と死に分かれる」は、親しい者との死による別離が関係性のなかで捉えられ、意味付けされる特質を示す。高齢者は親しい人（家族）、言わば「2人称の死」¹⁵⁾の経験により、悲しみ、嘆き、後悔などの感情を抱いている。親しい人（家族）と共に過ごした生活を回顧するなかで、故人はこの世界に実際には存在しないが、超越的な視点から目に見えないかたちでつながっている実感をもつ者もいる。

「死と向き合う態度を取る」は、死の現実の前で、死に臨み、向き合うときの人間の心構えや感情的傾向を表している。高齢者は、自らの死生観、死の本質的な理解を踏まえ、「覚悟をする」「弱音を吐かない」あるいは、「考えないようにする」「神様にお任せする」と、死に臨むときの、死の状況に対し準備状態にあり、死に際する心構えなどふさわしい態度をもち臨もうとしている。「お墓を大切にする」は、死後の行き先に思いを馳せるときの墓の存在と役割を大切に思うことである。墓は人の気持ちを時間と空間を超えた死後の世界に向かわせ、現世と死後の

世界（永遠なるもの）をつなぐ役割をもつ。また、墓は死後の行き先を保障するものであり、墓の存在は日々の生活に安心をもたらす。さらに、墓は自分の死後、親族など世代を超えた家族のつながりを確認するため重要なものである。[死ぬことへの準備をする]は死を見据え、現実的で具体的な準備をしていきたいとの願いを表している。死後の墓でのお骨の納め方、葬儀の進め方、財産の譲渡、延命治療の有無やそのあり方について親族や第三者の専門職に託す者もいる。

4.1.5 有限な存在として生きる

カテゴリ：「有限な存在として生きる」は、心身に痛みを負い、人間関係や環境と不適応を起し、生活上困難を経験し、痛みや苦難を負い、やがて死を迎える人間の有限性とその生を示している。

このカテゴリはコード：[人生に悔いを覚える][病気や苦しみの意味を問う][人生に空虚感を抱く]から構成される。

[人生に悔いを覚える]は、人生で経験した出来事、特に転機と思われる事柄を回顧するときの悔いのことである。高齢者は今に至って取り消せない事柄を回顧し、当時の判断や行為を憂慮し悔いを覚える。悔いの根底には不条理感（人生は自分の思うよう成らない）と失望感（人生に期待できない）がある。

[病気や苦しみの意味を問う]は、有限な存在であるゆえに経験する病気や苦しみがどこから来るのか（原因）とその意味を問う特質である。高齢者は生涯にわたり生命が脅かされその疾病と苦痛に向き合う。病気や痛みの原因や理由が、宗教的な背景をもつ因果応報の思考（疾病は前世の行為の報い）により解釈される場合がある。[人生に空虚感を抱く]の空虚感とは、有限な存在である人間の生が意味で満たされない時に生じる空しさの感情である。高齢者は心身の機能が低下し、生活に支障をきたし、社会で役割を果たせなくなる。そこで有用感がもてないことで、自分の存在とその生に価値を見出すことができず空虚感を覚える。

4.1.6 責任を果たして生きる

カテゴリ：「責任を果たして生きる」は、時間の軸を現在から未来へ向け、人間の有限性に対し、意味へ応答するのなかでふさわしい態度を示す人間の特質である。この意味へ応答していく態度は、将来を見据える時、自分に委ねられ、託された務めがあるとの使命感、責任感、義務感となる。それは信念、信条、規範として表わされる。

このカテゴリは、コード：「自分の生き方を整える」「達成したい目標をもって過ごす」「人のために力を尽くして生きる」「大切なことを伝えておき

たい」から構成される。

[自分の生き方を整える]は、日常の働きや経験を再評価し、意味に満ちた望ましい生き方と生活の実現を志向し行動することである。高齢者は人生で悲しみや絶望に苛まれる経験をするが、人生の目的はどんな境遇にあっても、与えられた命を守り、信念をもってふさわしい行動をすることができるとの自覚のもと生活を営んでいる。[達成したい目標をもって過ごす]は、日常生活で達成したい目標をもち、実現させるために行動したいとの願いである。高齢者は、以前にしていたことができなくなることによって葛藤を覚えつつ、これまで培ってきた知識や技能を用い、仕事や趣味を継続し、楽しみたいと願っている。同時に、生活機能の制限により、それらが実現できない現実と向き合っている。

[人のために力を尽くして生きる]は、人間がもつ他者性を表現し、自己犠牲を払ってまでも、人のために力を尽くしたいと願う特質である。高齢者は活動に制限を余儀なくされ、生活に困難さを抱えるが、そのただなかで、他者（家族）に心を向け、力を尽くし助けたいと願っている。[大切なことを伝えておきたい]は、人生で経験のなかで大切にしてきた物や事柄、人としての価値を次世代に伝え残したいとの願いである。高齢者は次世代に、人生の営みに必要となる、かたちある物、思想や慣習（時間の連続性を意識した価値）の伝承のニーズをもっている。また、自らの死生観を踏まえ、死を迎える際のリビングウィル（延命治療の有無など）や死の事後の方法などを具体的に伝える者もいる。

4.2 生きる意味としてのスピリチュアルなテーマを捉える理論的枠組み

本研究では、スピリチュアリティの主要な下位概念である生きる意味を手掛かりに、人生の意味の観点から、「生きる意味に関する質的調査」を行った。この分析の結果、高齢者のスピリチュアリティを捉える理論的枠組みが明らかになった（図1）。このスピリチュアリティの概念を捉える枠組みは、横軸：「時間」（過去、現在、未来）、縦軸：「関係」（3層の次元：超越の次元、経験の次元、実存の次元）、そして、各テーマの基盤：動機（意味付けの動因）となる「価値」（創造価値、体験価値、態度価値）^{17)†3)}より構成されている。図1は、この枠組みに本調査で抽出された、高齢者の生活上経験する生きる意味としてのスピリチュアリティの6つのカテゴリを位置づけたものである。以上、高齢者のスピリチュアリティを「生きる意味」の観点から分析するとき、「時間」「関係」「価値」の理論的枠組み（説明図式・理論）で解釈し捉えることができるのでは

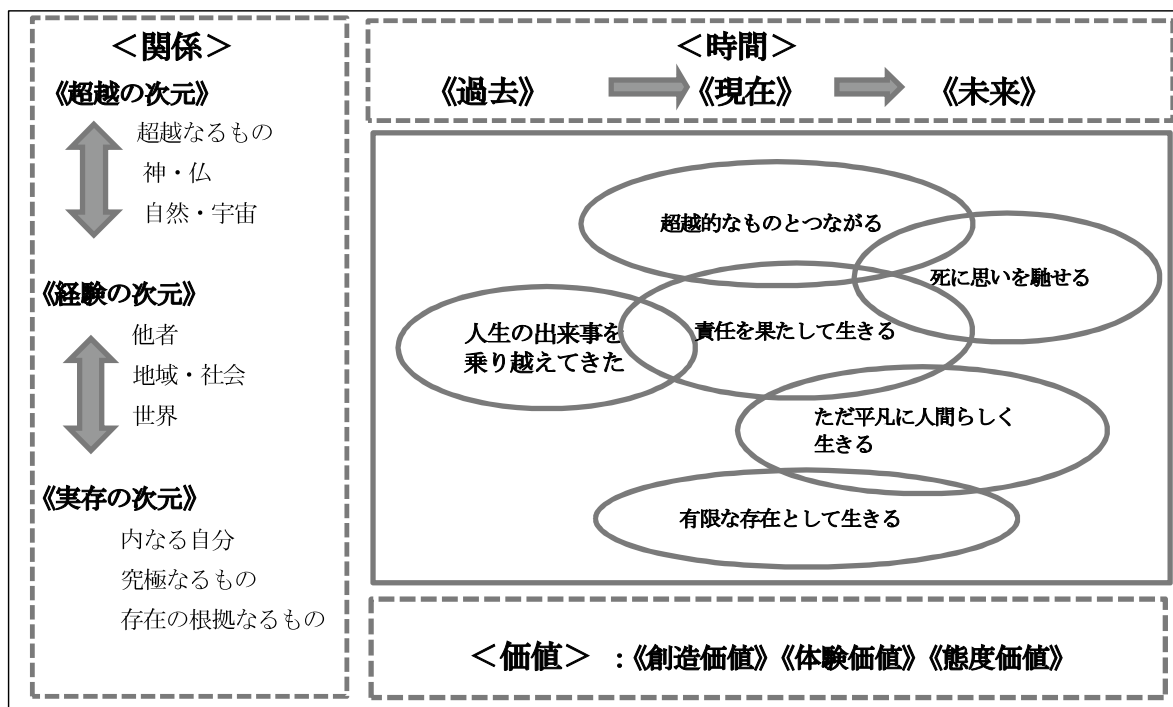


図1 高齢者の生活上のスピリチュアルなテーマとその位置づけ

ないかと考える。

4.3 高齢者が生活上経験する生きる意味としてのスピリチュアリティ

4.3.1 高齢者の生活上のスピリチュアルな痛み (spiritual pain)

高齢者は、有限な存在として全人的な痛み (total pain) すなわち、身体的・心理的・社会的・スピリチュアルな痛みを負っている。高齢者は日常生活を「有限な存在として生きる」[そこで病氣や苦しみの意味を問い、過去の出来事への悔い、親しい者（家族）との死別（「死に思いを馳せる」）]などの様々な喪失体験は、主に創造価値の喪失による内的な痛みとなり、人生が意味で充足できないとき空虚感を感じる。これらは経験の次元での経験するスピリチュアルペインである。このようなスピリチュアルペインの緩和、解消には超越なるもの、他者、内なる自分との関係による「和解」¹⁸⁾が課題となる。

4.3.2 高齢者の生活上、ストレンクス (strength) として機能するスピリチュアリティ

スピリチュアリティは生きる意味を見出す側面として高齢者の生活を支えるストレンクス (強み) をして理解することができる¹⁹⁾。「人生の出来事を乗り越えてきた」は、高齢者が時間軸を過去に向け、経験の次元で体験した出来事を統合することにより、人生の再評価と自己肯定が実現することを表している。「ただ平凡に人間らしく生きる」は、高齢者が時間

軸を現在から未来に向けると、平凡な生活を望み、3層から成る次元での関係のなかで、生きる意味を見出す生き方が表れ、創造価値よりも、体験価値や態度価値に重点を置いていることが分かる。「超越的なものにつながる」には、「老年性超越」²⁰⁾の特徴が表れている。ここから高齢者が超越の次元の超越なるものとの関係のなかで、時間を越えた永遠なるもの、真実なるものに意味付けの根拠を求め、超越的な視点より自らの存在と生を捉えていることが分かる。「責任を果たして生きる」には、高齢者が時間の軸を現在から未来へ向けるとき、人間の有限性に対し、「人生から何を求められているか」との超越の次元より意味に応答し、そこで、様々な人生での窮状や生活課題にあってもふさわしい態度を取ることができる、言わば「にもかかわず」という逆説的な生き方を可能とする特質が表れている。

5. 結論

本研究の「生きる意味に関する質的調査」の結果と分析により、福祉サービスを利用する高齢者が生活上、生きる意味としてのスピリチュアルなテーマを有して生活を営んでいること、6つのカテゴリと23のコードの抽出と考察からは、その特徴が明らかになった。利用者の個別性を考慮した福祉サービスが提供されるためには全人的な (holistic) 理解が必要であり、その際に価値、信条、宗教の内容を

含む、生きる意味に関連するスピリチュアルな側面に焦点が当てられることが重要である。また、本研究で、高齢者のスピリチュアリティを捉える理論的枠組み（説明図式・理論）：「時間×関係×価値」が提示された。この枠組みを活用し、高齢者が生活上経験するスピリチュアルな痛み、意味の充足を促すストレングスとして機能するスピリチュアリティの理解が必要である。

本研究の限界は次の通りである。質的研究での福祉サービス利用者が固有にもつスピリチュアルなテーマの抽出と分析がまだ途上であること、また、カテゴリー・コード間の関係や理論的枠組み（説明図式・理論）における高齢者のスピリチュアルなテーマに関して十分な分析と考察ができなかったことである。これらは今後の課題としたい。

注

- †1) 浦田悠⁷⁾は、心理学の分野で、「人生の意味モデル」の基本的枠組みを構築している。そのなかで、地上的・具体的な次元で問われる中で何を意味しているかを表す「生活の意味」(meaning in life)と、普遍的・一般的次元へと敷衍されるときに生きること全体の意味を表す「人生の意味」(meaning of life)を区別している。筆者は、後者が前者を含むと解釈し、本研究の「生きる意味」を両方の意で用いることとする。
- †2) 柳田邦男¹⁵⁾は、死を人称による捉え方の違いにより表現する。「一人称（私）の死」は、自分自身の死で、客観化して受けとめることができない死である。「二人称（あなた）の死」は、連れ合い、親子、兄弟姉妹・恋人の死である。人生と生活を分かち合ったかけがいのない人（肉親や恋人）を失う時に、自分自身の一部を喪失したかのような辛さや悲嘆を経験する死である。「三人称（彼・彼女・ヒト一般）の死」は、第三者の立場から冷静に見ることのできる死である。
- †3) 山田邦男¹⁷⁾は、Frankl VEの人間が実現しうる3つの価値を次のように解説する。「創造価値」とは何かを行うこと、行動したり創造したりすること、自分の仕事を実現することなどにより実現される価値である。「体験価値」とは、何かを体験すること、自然、芸術、人間を愛することによって実現される価値である。「態度価値」とは、自分の可能性が制約されていることが、どうしようもない運命であり、避けられず、逃れられない事実であっても、その事実によどのような態度を取るかということにより実現される価値である。

なお、本研究は、2013年～2015年度科学研究費助成事業（基盤研究（C））「社会福祉分野におけるスピリチュアルな側面を鑑みたアセスメントツールの開発」（課題番号：25380820）の助成を受けたものである。ここに記して御礼申し上げます。

文 献

- 1) 深谷美枝、柴田実：福祉・介護におけるスピリチュアルケア その考え方と方法。初版、中央法規、東京、42-62, 2008.
- 2) 岡本宣雄：要介護高齢者におけるスピリチュアルニーズに関する研究－特別養護老人ホーム入居者の意味探究ニーズ－。先端社会研究, 4, 71-100, 2006.
- 3) 世界保健機関編、武田文和訳：がんの痛みからの解放とバリアティブ・ケア。第1版、金原出版、東京、48-49, 1993.
- 4) 村田久行：ケアの思想と対人援助－終末期医療と福祉の現場から－。改訂増補版、川島書店、東京、131-178, 1998.
- 5) エドワード・R・カンダ、レオラ・ディラッド・ファーマン、木原活信、中川吉晴、藤井美和監訳：ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か。初版、ミネルヴォア書房、京都、98, 2014.
- 6) エドワード・R・カンダ、レオラ・ディラッド・ファーマン、木原活信、中川吉晴、藤井美和監訳：ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か。初版、ミネルヴォア書房、京都、111, 2014.
- 7) 浦田悠：人生の意味の心理学－実存的な問いを生むところ－。初版、京都大学学術出版会、京都、215, 2013.
- 8) 佐藤文子監修：PILテストハンドブック（改訂版）第I部 PILテストの全体像と分析法。改訂版、システムパブリカ、東京、2008.
- 9) 三澤久恵、野尻雅美、新野直明：地域高齢者のスピリチュアリティ評定尺度の開発：構成概念の妥当性と信頼性の検討。日本健康医学会雑誌, 18(4), 170-180, 2010.
- 10) 佐藤郁哉：質的データ分析法－原理・方法・実践－。初版、新曜社、東京、2008.
- 11) 村社卓：介護保険制度下でのケアマネジメント実践モデルに関する研究－「調整・仲介機能を特化させた給付管理業務」に焦点をあてた質的データ分析－。社会福祉学, 52(1), 55-69, 2011.

- 12) E.H. エリクソン, J.M. エリクソン, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳: ライフサイクル, その完結. 増補版, みすず書房, 東京, 79, 2001.
- 13) 藤井美和, 李政元, 田崎美弥子, 松田正己, 中根允文: 日本人のスピリチュアリティの表すもの: WHOQOL のスピリチュアリティ予備調査から. 日本社会精神医学会雑誌, 14(1), 3-17, 2005.
- 14) 窪寺俊之: スピリチュアルケア学概説. 第1版, 三輪書店, 東京, 23-25, 2008.
- 15) 柳田邦男: 犠牲 (サクリファイス) - わが息子・脳死の11日 -. 第1版, 文藝春秋, 東京, 1999.
- 16) Ai AL: Spiritual Well-being, Spiritual Growth, and Spiritual Care for Aging: A Cross-Faith and Interdisciplinary Effort, *Journal of Religious Gerontology*, 11(2), 3-28, 2000.
- 17) 山田邦男: フランクルとの<対話>- 苦悩を生きる哲学 -. 初版, 春秋社, 東京, 112-113, 2013.
- 18) 山田邦男編: フランクルを学ぶ人のために. 初版, 世界思想社, 京都, 21-24, 2002.
- 19) Hungelmann J, Rossi EK, Klassen L and Stollenwerk RM: Spiritual Well-being in Adults: Harmonious Interconnectedness. *Journal of Religion and Health*, 24(2), 147-154, 1985.
- 20) Tornstam L: Gerotranscendence reformulation of the disengagement theory. *Aging*, 1(1), 55-63, 1989.

(平成27年 5 月20日受理)

A Study on Spiritual Themes That the Elderly Will Experience on Life – qualitative research that focuses on the meaning of life

Nobuo OKAMOTO

(Accepted May 20, 2015)

Key words : spiritual themes of elderly, meaning of life, qualitative research

Abstract

By focusing on “the meaning of life,” which is a major subordinate concept of spirituality, the present study, using qualitative research, clarifies the spiritual themes faced by elderly people who utilize welfare services and need the support of nursing care. As a result of the Qualitative Survey on the Meaning of Life conducted, these 6 categories: “I made it through the events of life,” “I want to live just an ordinary humane life,” “My life leads to transcendent things,” “I give more than a passing thought to death,” “I live as a finite existence,” and “I live to fulfill responsibilities,” and 23 codes related to them were extracted. Furthermore, the theoretical framework of “time x relationships x values” was presented to grasp the spiritual themes of the elderly. There is a need to utilize this framework to understand the spirituality that functions as a strength to draw meaning out of the spiritual pain experienced in the lives of the elderly.

Correspondence to : Nobuo OKAMOTO

Department of Social Work
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : nobuo@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.25, No.1, 2015 37 – 47)

